

江東区 ゆかりの人

いし だ は きょう  
石田波郷



## 砂町に暮らした石田波郷

### 石田波郷 略歴

石田波郷は大正2年(1913)に愛媛県で生まれました。昭和21年から33年(1946~1958)まで約12年間江東区砂町に住み、砂町を第二の故郷と呼んでいました。中学時代、同級生の後の大友柳太朗の勧めで俳句を始め、高濱虚子の『ホトギス』で4Sと言われた俳人の一人である水原秋櫻子に師事しました。水原秋櫻子が『ホトギス』から独立し起こした『馬酔木』の編集にも関わりました。

加藤楸邨、中村草田男と共に、人間探求派と呼ばれ、『鶴』や『現代俳句』を創刊するなど、戦後の俳壇を先導しました。高濱虚子の没後は朝日新聞選者となり、俳句だけで生計を立てた数少ない俳人の一人でした。昭和44年(1969)、56歳で亡くなりました。

### 石田波郷の代表的な句

バスを待ち大路の春をうたがはず

初蝶やわが三十の袖袂

霜柱俳句は切字響きけり

七夕竹借名の文字隠れなし

ひとつ咲く酒中花はわが恋椿

### 石田波郷が江東区を詠んだ句

百方の焼けて年逝く小名木川

江東唯焦土

はこべらや焦土のいろの雀ども

一樹無き小学校に吾子を入れぬ

ひとり寒し砂町銀座過ぎるとて

霜の墓抱き起されしとき見たり

いしだはきょう  
石田波郷 年譜

年号	西暦	年齢	事項
大正2年	1913	1歳	愛媛県に生まれる。
昭和7年	1932	20歳	5月頃、東京市経営の深川一泊所に勤務。 10月頃、深川一拍所を辞し、馬酔木の事務を手伝い水原秋桜子の庇護を受ける。
昭和17年	1942	30歳	九段軍人会館にて吉田安嬉子と結婚挙式。 夫人は幼い頃、森下で育った。
昭和18年	1943	31歳	日暮里鶴句会の人々とともに、「猿蓑」をテキストに古典研究を始める。 後に風切会に発展する。
昭和20年	1945	33歳	米空軍の東京大爆撃により北砂町の妻安嬉子の実家焼亡。
昭和21年	1946	34歳	江東区北砂町1-805に転居。 綜合俳誌「現代俳句」を創刊。砂町の自宅で編集に当る。 荒川放水路に遊び、四年ぶりに秋桜子と対面する。
昭和24年	1949	37歳	12月29日、入院していた東京療養所から外泊許可を得て北砂町の家に戻り越年。
昭和25年	1950	満37歳	2月21日、東京療養所退所。 北砂町の自宅に戻る。しかし排菌未だやまず。
昭和32年	1957	満44歳	読売新聞江東版に「江東歳時記」を連載、翌年2月3日に及ぶ。 鶴江東支部の人たちの葛西昇覚寺蓮見句会に出席。
昭和33年	1958	満45歳	練馬区谷原町2-2357に新居成り転居する。
昭和34年	1959	満46歳	江東区北砂町妙久寺に、鶴江東支部会員の手により「はこべらや焦土のいろの雀ども」の句碑成り、除幕式がおこなわれる。
昭和41年	1966	満53歳	『江東歳時記』（東京美術）刊行。
昭和44年	1969	満56歳	11月21日、午前8時30分頃死去。

## 常設展示 石田波郷記念館

昭和を代表する俳人、石田波郷が  
戦後12年間暮らした砂町の地にある記念館です

俳人・石田波郷の功績と人間像、江東区との関わりを紹介し顕彰するため、平成12年12月に、波郷自身が「第二の故郷」と呼んだこの地に石田波郷記念館を開館しました。

記念館では、波郷の俳句文学活動、その生涯などをご遺族から寄贈された遺品・作品を中心に展示紹介しています。

開館時間／9:00～21:00

休館日／第1・3月曜日（祝日の場合は開館）及び年末年始

観覧料／無料

公益財団法人  
江東区文化コミュニティ財団  
砂町文化センター

〒136-0073 東京都江東区北砂5-1-7  
TEL 03-3640-1751 FAX 03-5606-5930  
<https://www.kcf.or.jp/sunamachi/>

